

源氏物語爪印 夢浮橋巻

村 井 利 彦

- 【1】冒頭からして、前巻に間断なく接続している印象である。帚木巻から空蟬巻への流れと同じ。両巻は不離一体であることを示している。ならば、空蟬巻の時と同様、なぜ一巻たてたか、が最大の問題となる。
- 【2】まず、根本中堂を訪れた薫が、翌日「横川」に行く。その間の距離は、およそ5キロ。尾根伝いの山道で、容易な行程ではない。薫の熱意の程が、その行為に表現されている。
- 【3】薫は、横川の僧都とそれほど親しい間柄ではなかった。が、女一宮の病気以来、心服するようになった。という記事は、宇治の阿闍梨、八宮との出会いを思い起こさせる。→橋姫巻。近い過去を、薫が再び繰り返すというのか。そうは多分ならないだろう。が、こうすることによって、横川の僧都は、すでに描き切られた宇治の阿闍梨や八宮によって相対化される。
- 【4】横川僧都は、若紫の北山僧都のような、最初から主人公と極めて昵懇という設定ではない。住んでいる横川の場合といい、僧都の、超俗性のしからしむるところだろう。
- 【5】しかし、薫が、僧都に浮舟の消息を問うところ、光源氏が北山僧都に紫上の素性を聞いた場面を彷彿させよう。これは意識的操作ではないか。
- 【6】母を側におく僧都。「夜中暁にも、あひとぶらはむ」(260) と思って麓に母を置いている。恩愛にこだわる僧都。いままでの宗教人と違った印象である。浄土教の優しさか。妹尼や孫を側に置いていた北山僧都と、これは同じ設定である。
- 【7】小野の地に関する情報。「ただ近きころほひまで、人多う住みはべりけるを、今は、いとかすかにこそなりゆくめれ」(260)。これからすると、小野は最近急速にさびれていった土地であったということか。前巻にも同趣旨の記述がある。→手習巻【0103】。横川のさびれは、比叡山の衰亡と連動していると考えべきか。
- 【8】薫の話聞いた時の僧都の心理。「法師といひながら、心もなく、たちまち

に容貌をやつしてけること」(261)。浮舟の出家を許したことが軽率であったという反省である。宗教人としての信念より、隠しおおせぬ状況を認め、薫に対する配慮を優先させている。俗だ、と作者は書いているのであろうか。あるいは現実に対し率直で、融通無碍な対処だということだろうか。確かに、この僧都は、固い印象の阿闍梨や八宮とは違う。→【3】。

【9】事情説明をする僧都の話(261～3)。前巻で、明石中宮に語ったように、事実を詳細に語る。僧都は生来饒舌の人とみえる。「宇治の院」で浮舟を発見した時、自分は「昔物語に、魂殿に置きたりけむ人のたとひ」を思い出したと、声を低めて語った。この昔物語、特定しがたい。が、宇治の院、蘇生とくれば、死んでから三日後、駆けつけた兄大鷲鶴(仁徳天皇)が「髪を解き屍に跨がりて、三たび呼」んだところ、一旦生き返って礼を述べた宇治稚郎子のことが思い出される。→『日本書紀』。

【10】「助けて京に率てたてまつりて」(262)よりすると、小野は「京」で、宇治は「京」ではない。宇治が当時どのように思われていたかを示す恰好の記述である。

【11】僧都の妹尼は、「故衛門の督の北の方」(262)であった。これは、前巻でも触れられていることだが、衛門督といえば柏木。という連想がはたらく。が、ここは、空蟬の父のことを考えておく方がよい。作者は、源氏物語の終わりに、源氏物語初期の風景を重ねようとしている。

【12】浮舟が妹尼に、亡くなった娘の生まれ変わりで、観音からいただいたものだと思われているという話が、再び僧都によって紹介される。これが、なんの根拠もない話だということは、僧都をはじめとして読者は等しく知っている。ということは、ここで作者が形代思想にピリオドを打とうとしている様子を了解すべきである。浮舟は、そういう存在である。浮舟は浮舟であって、他の誰でもない。となれば、空蟬が空蟬になった空蟬巻と同様の発想で、この巻が描かれていることが了解されよう。→【1】。

【13】浮舟が、僧都の護身で「やうやう生き出でて人とな」(263)ったのは、物怪が退散したからであった。出家は、その後で、あくまでも彼女の意思であった。けっして物怪がそうしたのではなかった。「なほこの領じたりけるものの、身に離れぬこちなむする」(263)は、浮舟の嘘、出家のための方便であった。このこと、読者には充分承知のことである。このことを確認強調するために、この僧都の長々しい説明があるのだ、と考えたい。

【14】僧都の罪の意識。「かくおぼしけることを、この世には亡き人と同じやうになしたることと、あやまちしたるこちして、罪深ければ」(264)。

【15】薫は、浮舟のことを「なま王家流(わかむどほり)などいふべき筋」(264)と僧都に言っている。浮舟は光源氏の名残の光芒という位置づけである。

- 【16】僧都は、洗いざらい全部喋っているのに、事情を問われた薫は、いかにも臆な返答である。自分のことはさておいて母をもちだすところ、あいかわらず素直でない薫らしい。率直な僧都の前で、これは歴然たる相貌を呈する。
- 【17】母に知らせたい、と薫は言う。母の愛が、奇妙に目立つ。子を思う親の闇。一番寂しい愛の形を書いて、作者は、このあたりで人間の孤独を表現しようとしているのではないか。
- 【18】僧都にいますぐ坂本に連れていってくれと要請する薫の申し出は性急にすぎる。都合が悪く来月にしてほしいと僧都が間をおいたのは、僧都のせめてもの抵抗である。ほいほいと応じたとすれば、僧都の軽薄な印象は決定的なものとなる。しかし、この「間」が、浮舟の人格を保証し、浮舟の決断を動かぬものに固める結果をもたらすような予感がするが、はたしてどうか。
- 【19】僧都の心は一貫して人間的である。「容貌をかへ、世を背きにきとおぼえたれど、髪鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらむ、いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかな」(265)。いささか女を馬鹿にした書きっぷりである。それはともかく、源氏物語は「あやしき心失せぬ」群像を描いてきたのであるけれども、最後の最後で「あやしき心失せ」た人物を点出して締め括る。という結末が想像される条文である。
- 【20】浮舟の「せうとの童」を薫が連れてきているのは、不自然ではない。小君が「異兄弟どもよりは、容貌もきよげなる」(266) 男で、これを身辺においているところ、手習巻からの自然な展開である。→手習巻【0116】。
- 【21】弟を小野に派遣するから、「御文一行賜へ」(266) という薫の申し出をも、僧都は一旦拒否する。恋の仲立ちをやるわけにはいかない、後は自らの責任において行動してもらいたいという趣旨を述べる僧都は、恋の仲立ちをも積極的につとめるように書かれていた前巻の妹尼とは対照的である。「このしるべにて、かならず罪得はべりなむ」(266) から分かるように、妹尼の行為は仏教者としてあるまじき振る舞いなのである。歴史資料上の願西と源信の関係は、ここでは完全に逆転している。
- 【22】僧都に誤解されていると思った薫が弁明する。自分は「心のうちは聖に劣りはべらぬもの」(267) だという。悲しいかな、この弁明を額面通りうけとる読者は一人もいまい。しかし、この弁明は僧都の心を動かす。僧都の善良さが目立つ場面である。薫は確かに、俗のことはよく分かっているが俗にまみれてはいない。若菜巻初期の、光源氏と朱雀院の関係を思い起こすべきだろうか。
- 【23】愛欲が「重き罪得べきこと」(267) だという認識。恋愛は、同情すべきものという意識が読み取れよう。
- 【24】僧都の心が動いたのは、薫が母・女三宮という「さがりがたきほだし」に「かかづら」って本意を遂げられぬままに今日まできているのだという点であろう。

これは、僧都の現状に照らせば、容易に了解されるところだ。母への愛は、源氏物語の根幹を流れる思想である。この「ただいとほしき親の思ひ」(267)が、源氏物語の最後になって水面上に浮かび上がる。僧都、薫、そして浮舟。

【25】僧都は面喰い。弟を「目をとめてほめたまふ」(267)。浮舟にこだわったのも、浮舟が美人であったためであった。美人は、前世での善行の証明、ということであった。→手習巻【23】。

【26】こうして、一旦拒否した手紙を僧都は引き受ける。どういう内容であるか、興味をそそられる。

【27】「小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向ひて、まぎることなく、遣水の蛭ばかりを」(268)の記述より、場面は浮舟に転換する。季節は夏に設定していることがわかる。

【28】「横川に通ふ人のみなむ、このあたりは近きたよりなりける」(269)とある。妹尼の草庵から見える道は、横川中堂に通う人のみが通る道であることが確認される。夕霧巻で舞台となった小野より少し奥にはいったあたりと前巻にはあった。「かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今すこし入りて、山に片かけた家」(193)。集成の注には「長谷出坂」とある。「坂本」は長谷出のあたり。この巻の「はるかに見やらるる谷の軒端」(268)という表現からすると、野瀬町あるいは八瀬のあたりかと思われる。作者は、このあたりかなり土地カンがあったものと見える。

【29】薫が、浮舟の弟を、通りかかった帰り道で遣わさず、一旦帰ってから改めて派遣しているのは、「人目多くて便なければ」が理由だが、浮舟への敬意表現になっている。「ことさらにぞ出だし立てたまふ」(269)。私的なものが、読者にとっては公的な行為に見えるところが面白い。物語というものは、そもそもこういう世界なのだということを再確認させてくれる条である。

【30】また、こうも考えられる。一日の「間」をおくことによって、僧都が小野に何らかの連絡をし、薫と浮舟との対面にむけての環境が整うはずである。そこに小君を派遣すると効果はさらにあがるという計算もあろう。政治家・薫なら、このあたりの勘は造作もないことであったと考えたい。

【31】薫は弟に言う。「その親の御思ひのいとほしさにこそ、尋ぬれ」(269)。母の愛の強調。→【24】

【32】弟の「をを」という返事。いかにも少年らしい。真っ直ぐに目的にむかい、余念のない印象である。

【33】僧都からの早朝の手紙。予想どおりの展開である。→【30】。僧都はこの中で、浮舟の弟を「小君」と呼んでいる。この呼称、浮舟の印象を夕顔から空蝉に一気に変換する。当然、拒否の雰囲気作りのためである。前巻に出てきた紀伊守という呼称がここで生きる。夏という設定も、もっともらしい。源氏物語は空蝉

に始まり空蟬で終わるということか。→手習巻【0107】。夕顔は夢。忘れられない女なのだ、という位置関係だろう。

【34】「みづから聞こえさすべきことも多かれど、今日明日過ぐしてさぶらふべし」(270)という僧都の文面よりして、彼は薫に与えた手紙の補足説明をするために二三日後に浮舟の許へ行くつもりである。手紙の内容が、難しいことを予想させる場面である。

【35】やって来た小君のはきはきした行動は、「をを」の連続で気持ちよい。浮舟には困った明確さである。

【36】「入道の姫君の御かたに、山より」(271)。手紙の上書きである。今とさして変わっていないところが面白い。

【37】僧都の手紙は、確かに要領を得ない。「愛執の罪をはるかしきこえたまひて」をどう解釈するか。「きこえ」があるから、愛執の罪を「はるかす」対象は浮舟本人ではない。薫の愛執だと考えるほうが自然である。文脈から考えても、この手紙が浮舟に還俗を勧める内容であると理解した方がよさそうである。「一日の出家の功德は、はかりなきもの」(272)という発想は、『三宝絵』序文にある「ただ一日一夜の出家の功德、諸の事の中に比ひ無し」と同じ発想である。そして、「御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山がつのなかに出家したまへること、かえりては、仏の責め添ふべきことなる」(271～2)という僧都の言葉は、なまうかびを咎めた雨夜品定め論理である。還俗勧奨の手紙だと了解するとどうなるか。この手紙を見た瞬間に、浮舟は、僧都という最後の防波堤を失ったことになる。僧都の浮舟に対する理解も、左馬頭のレベルであったという冷たい認識である。かくて浮舟は誰にも理解されることなく源氏物語の最後の地で孤立する。そう考えた方が、源氏物語の最終場面にふさわしいように思うがどうか。

【38】浮舟の母へのこだわり。「まづ母の有り様、いと問はまほし」(273)。他のことはどうでもいい、ただこれだけが俗世の気掛かりだ、という語気である。人間の原初基底の愛を描いているのだと思う。

【39】よく覚えていないという浮舟の言葉(273～4)は嘘である。彼女は嘘をつきおおせて現状を死守しようとしている。援護してくれる人が一人もない環境の中で孤壘を守ろうとしている。無理な行為であることは誰の目にも明らかである。そのうち薫が牛車でやってきて、所帯道具もろともに彼女を車の中にぶち込んで連れて帰るという乱暴な場面さえ予想されよう。『蜻蛉日記』にある兼家の行動で、すでに馴染みのものだけれども。「あまがえる」。

【40】浮舟の言葉の中に「紀伊の守」が出てくることに注意。作者が、浮舟を空蟬のイメージで覆おうとしている様子がみてとれよう。空蟬は頑固に自己を貫いた。浮舟もそうなる、という暗示か。空蟬が最後には、光源氏の庇護をうけ東院で生

涯を終えたという処置も、この際有効だろう。浮舟は、薫との愛執の道から脱しつつ、薫の広い愛にまもられて生涯を終えるという未来のイメージがひろがる。

【41】母一人には逢いたい。それ以外の人には「今さらに、かかる人（小君）にも、ありとは知られでやみなむと思ひはべる」（274）。そして、「僧都ののたまへる人などには、さらに知られたてまつらじ」と浮舟は強調する。母の強調。母にも逢いたくない、とは言わない。とすれば、母から弟、弟から薫へと情が崩れてゆく可能性がないわけではない。浮舟の不徹底とこれを責められるや否や。

【42】妹尼による僧都評。「僧都の御心は、聖といふなかにも、あまり限なくものしたまへば、まさに残いては聞こえたまひてむや。後に隠れあらじ」（274）。まさに凶星である。

【43】小君の言説行動は、しっかりしている。薫が信頼して使者とただけのことはある。

【44】薫の手紙の内容。「さまざまに罪重き御心をば、僧都に思ひゆるしきこえて」（276）。僧都に免じてさまざまな君の罪は許す。出家させた僧都が悪い、というのか。あるいは、さまざまな罪は、僧都によって赦われたはず、ということか。いずれにしても、薫の優しさが際立つ言葉だ。浮舟よ、こういう寛大な男の許に帰ったほうが身のためではないのか、といった語気である。

【45】薫の歌。「法の師とたづぬる道をしるべにておもはぬ山に踏みまどふかな」（276）は、直接的には、昨日のことを指している。が、間接的には、宇治十帖のテーマである。最後にこの歌が置かれている意味は重いと思う。世俗を厭い世俗を出ようと強く志しながら、ついに果たされることなく、同じ強さで世俗に押し戻される物語。これが、宇治十帖であったという総括の歌である。結局、源氏物語は、この世の全てを書いた物語なのだ、という作者の自負ともとれよう。

【46】薫の手紙は、全編情愛のこもった優しい手紙であった。「いとこまやかなり」（277）は言いえて妙である。この手紙は、浮舟の心を動かしている。「その人にもあらぬさまを、思ひのほかに見つけられきこえたらむほどのはしたなさ」（277）という浮舟の胸のうちは、姿を変えた自分への後悔がにじんでいる。

【47】浮舟の返事。「今日は、なほ持て参りたまひね。所違へにもあらむに、いとかたはらいたかるべし」（277）は、匂宮との一件が露顕し、薫の詰問文が来た時の返事と同じである。→浮舟巻【0129】。この返事が、皮肉なことに、源氏物語の最後に置かれる薫の心中思惟の呼び水となるのである。

【48】妹尼は、小君に、浮舟を評して「もののけにやおはすらむ」（278）と言う。進退極まった時のもののけ頼みである。昔、藤壺出産の時は、これで通った。もののけの神通力はいまだ生きていのかどうか。はなはだあやしい。

【49】「雲のはるかに隔たらぬほどにもはべるを、山風吹くとも、またかならず立ち寄せたまひなむかし」（279）。と妹尼は最後に言ったけれども、浮舟のいる

所は、まさに「雲のはるかに隔た」った所ではないのである。浮舟は、押し寄せる世俗の風に舞う木の葉みたいな存在である。

【50】小君の復命を聞いた薫の反応「人の隠しすゑたるにやあらむ」は残酷な想像である。いくら「わが御心の思ひ寄りぬ隈なく、落し置きたまへりしならひ」とはいえ、酷いではないか。浮舟の心は、今や完全に君のものなのに。彼女は君の迎えを心の底で待っているにもかかわらず、それはないだろう。君の手紙と違うではないか。と、読者は思うにちがいない。この薫の心中思惟は、手習巻の終わりでも書かれているのだから、念がいつている。人違いでは、という本人の言葉。ものけですという妹尼の言葉。過去の経験からして、薫の出した予測は「男がいるのでは」であった。ひょっとして、誇り高い薫は、このまま浮舟を迎えにいかないのではないか。迎えにいかなければ、流れからいって、浮舟はこのままここに取り残され、いかな美人の浮舟とて僧都の母のような朽木となる未来から逃れることはできまい。→手習巻【0107】。薫が迎えにいったとしたらどうなるか。浮舟は、拒むにちがいない。前巻で、中将という仮象をつかって作者がおこなった予告がここで生かされる。彼女が断然薫を拒む時、彼女の出家は本物となる。浮舟が、俗な発想をする薫のしがらみを脱し、たった独りで夢の浮橋を渡る未来が開ける。絶対孤独。出家者・浮舟の完成である。ここで彼女は、「陵園の妾」のように、死者を祈り続けて生涯を終える。死者とは誰か。光源氏。いや、源氏物語の全ての登場人物と考える方がよいか。浮舟は「陵園の妾」となるのではないか。薫の迎えを受け入れたらどうなるか。なまうかびの女となって無惨に生きるのみ。ならば、そういう女の世界が源氏物語の世界なのだから、彼女は、巨大な源氏物語の女性群のなかに消えてゆく存在となる。彼女はもはや書くに足らぬ存在であろう。

【51】そもそも小野は、夕霧巻で見てきたように、誤解の似合う場所であった。誤解しあったまま、薫と浮舟はいつしか離れ離れになって。二人の上を別々な時間がゆっくりとつれなく流れてゆく。という結末が予想されよう。余情かぎりないことだけれども。ともかく、こうして源氏物語は終わる。見るべきものは見た。書くべきものは書いた。百年前から書いて書いて三代。時は現在、源信が横川にいる今日のこと。明日のことなんか分かるものか。といったところが作者の最後のジョークなのかもしれない。

【52】さて、巻名の「夢浮橋」だけれども、『往生要集』が唯識論を引いて次のようにいつている。「いまだ真覚を得ざるときは、常に夢中に処る。故に仏説いて、生死の長夜となしたまへり」(巻上)。源氏物語は、悟りにいたらぬ人々の「生死の長夜」を描いた、此岸の物語なのである。浮橋を渡って彼岸にいけるかどうか、それは思案の外ということのようである。なお、この「夢浮橋」という語は、「若紫」がそうであったと同じく、この巻にはない。「夢のわたりの浮橋か」とい

う光源氏の台詞が薄雲巻にある。→薄雲巻【23】。明石上とのはかない逢瀬を嘆いた言葉である。『奥入』の引用した古歌「世の中は夢のわたりの浮橋かうちわたりつつものをこそ思へ」に従えば、「うちわたりつつものをこそ思へ」という、この巻の登場人物たちの嘆き、浮舟や薫の心境の暗示となっている。これは、「生死の長夜」の発想と矛盾しない。また、「浮橋」が、行幸巻にあった船橋を意味するとすれば、此岸から彼岸にかかる仮橋のイメージで、浮舟が、いままさに彼岸に渡る千載一遇の時をわかえている状況の象徴ということにもなる。この発想も悪くないと思う。

(注) 本文は新潮古典集成『源氏物語』に依っている。() 内数字は、その所在を示している。